

神戸女学院の雰囲気

松田 高志

大学院を出て、3年ほど、京都に在る共学の大学に勤めた後、大学のゼミの先輩（岡本道雄先生）に引張って頂いて、本学に勤めることになりました。それ迄女子大学に勤めるとは全く思っていなかったの（恐らく多くの先生方も同じかと思いますが）、いろいろ不安や心配がありました。実際に本学に来てみて、キャンパスの雰囲気に全く違和感がなく、むしろとても好ましい印象を受けたのを覚えています。

京都とは違う、阪神間独特の「空気」のせいもあるかもしれませんが、とにかく岡田山のキャンパスは、明るく、穏やかで、解放的な雰囲気に包まれているように思いました。古い「良妻賢母」主義の狭苦しさや固さがなく（中高部も含めて制服や細かい校則がないことに先ず感心しました）、又逆に、国公立系の共学大学によく見られるような、ただ通行人がぞろぞろ歩いているような雑な雰囲気でもなく、学生の皆さんがよく言うように、アットホームというか、自由で伸び伸びできる居心地のよい雰囲気でした。そしてこの印象は、30数年経っても少しも変わりません。

確かに、女子学生ばかりの教室では、性格的なこともあって、なかなか自然体で授業するというわけにはいきませんでした。「いつも窓の方ばかり見て、こちらの方は少しも見えてくれないんですから……。今はどうですか。」と、卒業生の皆さんは異口同音に（心配して）言ってくれます。「有難う。少しはましになったかな。」と答えて、安心してもらうことにしています。しかし実際は、未だに自然体で授業できるという境地には至っていません。ゼミ等かなりリラックスしてやっているつもりですが、ある年、某共学大学に集中講義（10名ほどの受講生のほとんどが男子学生でした）に行った折、これが自然体というものかと思えるほど「素」のままの自分を出していることに気づいて、驚いたことがあります。やはりこの違いは、何ともしようがありません。

しかしだからと言って、本学に勤めて「後悔」しているわけでも何でもありません。最初に述べたように、恐らく他にはないような居心地のよい雰囲気の中で勤めることができたというだけで十分有難いわけですが、更にその上、次のようなことがあります。甚だ主観的

なことですが、本学に30数年勤めて、自分というものがずい分変わったなということです。それは、一言で言えば、少し抽象的になりますが、自分の中の「男性性」と「女性性」のひどいアンバランスが、かなり解消されたのではないかとということです。客観的にどうかは分かりませんが、自分にとって、このような変化があったということは大変有難いことであり、これは女学院に勤めることができたお陰であると思っています。

女学院は、創立以来、恐らくアメリカ本国でも特に優秀であった女性がおくられて来て、代々院長となり、リーダーとなって、女子生徒、女子学生を自由な人間へと解放し、成熟した大人へと育てようとして来たと思います。その為に、あらゆるところで意識的、無意識的に、いわば「女性性」の要素と「男性性」の要素が豊かに調和することがめざされて来たと思います。このキャンパスの好ましい雰囲気も、恐らくその結果ではないかという気がします。

女学院の体質として、いろいろ「もどかしい」ところがあるように思います。しかし（上に述べた）二つの「要素」のバランスを大事にする以上、それは、むしろ自然だと言ってよいでしょう。ただその中で常に知恵と工夫が求められています。これは、これからの時代の一つのモデル・ケースではないかと思っています。（文学部教授：教育学）

 連続セミナー「戦後60年の女性の歩み」を担当して

【第1回：2006年6月16日】……………松澤員子
●「戦後の混乱期に活躍した卒業生」

神戸女学院は1875年の創設以来、その教育の目標は、キリスト教に基づく男女の人格としての平等観に立ち、学生それぞれに与えられた才能と自らが置かれた機会を用いて、社会に貢献する女性を育成することであった。また、戦前には「大学令」による女子大学は存在しなかったが、本学院の専門部ではすでにアメリカのリベラル・アーツ・カレッジ・レベルの教育が行われていた。

戦時中、本学院の国際主義や自由主義の教育は、超国家主義が指導的イデオロギーとして強化されていく

中で、危機的状況に追い込まれていった。軍部の監視の目が厳しくなる中で、教育勅語の中からキリスト教の倫理と矛盾しない家庭倫理や社会倫理の部分を積極的に受け入れ、学院の指導者たちはその危機を乗り越えることができた。学生たちはみな学徒動員として、農村で、工場で、また学院内に設置された作業所で働く時間が増加、教室での勉学の時間が失われていった。しかし、学院の教育の根幹をなす聖書に基づく人間教育は堅持されていたのである。

戦後の混乱期、特に日米関係の大変換期にも、戦時中の卒業生たちは、矛盾に満ちた人間社会の現実を冷静に受け止め、自らが置かれた状況の中で、新しい社会の創造に積極的に参与していった。その事実をインタビューで確認している。大切なことはどんな知識を学んだかではなく、学生生活を通して身につけた精神的バックボーンであったのである。(神戸女学院院長)

【第2回：2006年6月23日】……………石川康宏
●「経済のあり方と主婦という生き方」

私のテーマは「経済のあり方と主婦という生き方」でした。①私がジェンダー問題に関心をもつようになったきっかけ、②資本主義の形成に応じた「近代家族」と「専業主婦」の誕生、③日本国憲法による男女平等の明記と「主婦の大衆化」、④はたらきたい女性の増加と社会環境のミスマッチ、⑤迷いつつ挑戦する学生たちと社会の課題、というような流れでした。少し盛り込みすぎかとも思いましたが、感想文には「経済と主婦の関係をはじめて聞いた」「面白かった」「自分の働きづらさの理由がわかった」といった言葉をいくつもいただくことができました。

さて、私のゼミの4年生は14名全員が就職希望ですが、正社員の求職が少ないなかで、ほとんどの学生がすでに就職先を確定しています。大変な健闘といって良いのでしょうか。とはいえ就職決定は、それだけで万々歳とはいえません。残念ながら、就職してから「カラダがもたない」「セクハラがひどい」といった理由で転職・退職を余儀なくされることがあるのです。これは卒業生個々人の責任に帰すべき問題ではありません。企業のあり方、社会のあり方の問題です。そして、それは「仕方のないこと」などではなく、大人たちみんなの力で改善していくべきことがらです。大学教育をつうじて、この厳しい社会を生き抜いたたかな力とともに、よりマシな社会づくりを目指す知恵と勇気をもった女性を育てたいと思っています。

(文学部教授：経済学)

【第3回：2006年6月30日】……………飯田祐子
●「ジェンダー・フリーとバッシング」

男女共同参画社会を目指す動きのキーワード「ジェンダー・フリー」に対して、近年、一部の大手メディアや、自民党の「過激な性教育・ジェンダーフリー教育実態調査プロジェクトチーム」(座長は安倍晋三氏)、「新しい歴史教科書をつくる会」の元会長西尾幹二氏や八木秀次氏などにより、はげしいバッシングがなされてきた。地方の自治体にも、同調する動きが出ている。「ジェンダー・フリー」は和製英語で、この語自体については、ジェンダー・スタディーズの中からも検討が必要とされてきた。しかし、バッシング派の意見は、そうした精密な議論に基づくものではない。記憶に新しいように、男女共同参画計画の見直しの際、「ジェンダー」という語すら排除すべきとする意見が提示された。このような意見は、膨大な研究や調査の世界的蓄積をふまえれば、現状認識を決定的に欠く非常識なものというより他ない。しかし問題は、無知ゆえの主張ではないところにある(少し調べればすぐ分かることだから)。根拠のない事例の列挙、歪んだ解釈は、確信犯的に行われている。バッシング派の発言には、ジェンダー・フリーへの批判が、憲法九条の改定に深く絡んでいることが示されている。性別役割意識は、戦争の出来る国家に必要なのである。ジェンダーについての考え方が、国家の枠組みについての考え方の根本に関わる問題であることがあらためて浮き彫りにされた現在、多様な生き方と平和を求めるためにも、バッシング派に厳しい批判を向けなければならない。(文学部助教授：日本文学)

【第4回：2006年7月7日】……………三杉圭子
●「母性というジェンダー」

「母性というジェンダー」というテーマでお話しをさせて頂きました。少子化の時代、昨2005年度の出生率は過去最低の1.29を記録し、5年連続の減少には歯止めがかかる兆しがありません。女性の社会参加を促す男女共同参画社会に向けての取り組みがなされる中、少子化問題については、「母性神話」、「三歳児神話」の名の下に、母親となる女性への負荷が重くなっています。

しかし、エリザベート・バダンテールが、母性は近代という歴史上の産物であるという研究成果を提唱して以来、母性もまた社会・文化の作り上げたジェンダーのひとつに過ぎないのではないかという考え方が現れました。それは、名実ともに真の男女共同参画社会を目指すのであれば、出産と不可分に語られる育児

<P. 4に続く>

アファーマーシオンの力と美の基準

國吉知子

言葉にすれば願いは実現する……それがアファーマーシオンの力である。

幼い頃、風呂場で膝の上にタオルを広げ石鹸を泡立っていた若き日の母の粋な姿を見て、私は思わずカッコいいと感じた。そして幼な心に「あんなふうにな（便利で）大きい膝に早くなりたい！」と願った。また、書道を習っていた小学生の頃、先生の手本を幾度まねて書いても、形は似せることができたものの、墨線そのものの凛とした強さ、勢い、過不足なく枯れた味わいをとうてい私は表現することはできなかった。自分の墨線は、どこかしらぶよぶよして、おおよそまじりがなく、「我」がじわじわと滲み出ている気がした。そこで小学生の私は、「先生のように、早く歳を取りたい！」とまたもや大真面目に願ったのであった。

美しさの基準はさまざまであるはずだ。どのような女性が社会的に美しいと評価されるのかについてまだ何も知らなかった頃の私は、母の太い膝に成熟した女性の落ち着いた美しさを感じ、素直に憧れた（便利だとも思ったのだが……）。書の先生は大家ではなかったが、そのしなやかでいて芯が強い墨跡は小学生の私の目にも底知れぬ魅力を湛えていた。

こういった多様な美を先入観無く感じる力は大人になると弱まってしまふのだろうか？ それとも、昨今の風潮が美の基準を画一化する方向に働いているのだろうか？ 現代は若い男性的価値観が強い影響力を持つ時代であると20年以上前にユング派分析家の樋口和彦氏から聞いた覚えがあるが、確かに最近その傾向に拍車がかかっているようにも思う（女子学生の顔や雰囲気似た人が多い気がするのは私だけだろうか？）。もっとも、このように書く私自身「平均寿命が昔50歳今80歳だったら、年齢の0.7掛のつもりで生きればいいやん」などと「年齢7掛説(?)」を推奨したり、「痩せた？」と言われて喜んだりしているのであるから、年齢や美醜に対するステレオタイプをとにかく言う資格はないのだが……。

かくして、幼き日の願いは（枯れた墨線を書けること以外は）叶ってしまった。まさに、アファーマーシオンの力、あなどりがたしである。

(人間科学部教授：臨床心理学)

自然科学分野における女性研究者

高岡素子

「京都大学理学部、初の女性博士です」、と教授から紹介されたM先生と知り合ったのは10年ほど前である。M先生は大学を65歳で退官後、最先端のタンパク科学を学ぶため、私が以前勤めていた大学の研究室に来られた。とても若々しく、気さくなお人柄で、研究の合間にいろんな興味深いお話をしてくださった。

先生のお話によると、今から約50年前には博士号を取得しても、女性が働く場を提供されることは稀であったらしい。やっと仕事に就いても「女性なのはどうして働くのか？」と周囲からの風当たりは強く、昇進さえ阻止されたようだ。

当時の自然科学分野で女性が研究を継続するには二つの方法があったようだ。1つは男性用の下着を着ける覚悟で、人生のすべてを研究に捧げ、がむしゃらに働く。もう1つは女を売り物にして、多くの人に依存して研究する方法である。当時の女性研究者は、必ずどちらかのタイプに属しており、それはとても悲しむべきことであると先生は語られた。

2006年度、政府は科学技術分野への女性の進出を促すため、今年から3年間で、女性研究者の採用枠の拡大を計画する大学に計15億圓を助成し、自然科学系で女性研究者の比率を25%に引き上げる数値目標を盛り込んだことが報告された。

学会や研究会に参加して感じるのだが、女子学生は比較的多いのに、30歳以上の女性はいつも数人しかいない。このことは自然科学分野で女性が研究を継続することは容易ではないことを意味している。

私の場合、大学を卒業後現在に至るまで、女性であることで仕事上不自由を感じたことはほとんどない。これは、この50年間に女性が学ぶ・働くことに対する社会全体の認識が変化した結果である。M先生を始め、女性として差別を受けながらもさまざまな形で研究を続けてこられた女性研究者の努力が、このような社会の認識を変えた大きな力であろう。

先生方から受け取ったバトンと、次の世代の女性たちに渡すことも、現在研究を続けている私たちの使命ではないかと考えている。

(人間科学部助教授：食品科学)

について、母性への過剰な依存を見直す必要があるのではないかという問いかけへとつながります。

具体的には生みの母親である女性だけではなく、父親である男性による次世代の育成が最も注目されていますが、ジェンダー・ステレオタイプに束縛された社会通念や企業の体制はまだまだそういったライフスタイルを支援するにはほど遠い現状であるのは周知のとおりです。

受講者の方々は戦後日本の変遷を多少なりとも実感してこられたからでしょうか、非常に柔軟な知性をもって丁寧な御質問や感想文をお寄せ下さいました。改めて問いかけることの大切さを認識する場を与えて頂きましたことに感謝しております。

(文学部教授：米文化・文学)

2006年度前期活動報告

特別講演会

2006年6月2日(金)

「憲法とジェンダー

ーベアテさんと共に考える日本国憲法ー」



若尾典子氏

会場：神戸女学院講堂

講師：若尾 典子氏

(県立広島大学保健福祉学部

人間福祉学科教授)

出席者：60名

連続セミナー「戦後60年の女性の歩み」

会場：神戸女学院大学ジュリア・ダッドレー館104教室

<第1回> 2006年6月16日(金)

「戦後の混乱期に活躍した卒業生」

講師：松澤 員子氏(神戸女学院院長)

<第2回> 2006年6月23日(金)

「経済のあり方と主婦という生き方」

講師：石川 康宏氏

(神戸女学院大学文学部教授：経済学)

<第3回> 2006年6月30日(金)

「ジェンダー・フリーとバッシング」

講師：飯田 祐子氏

(神戸女学院大学文学部助教授：日本文学)

<第4回> 2006年7月7日(金)

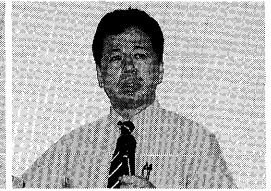
「母性というジェンダー」

講師：三杉 圭子氏

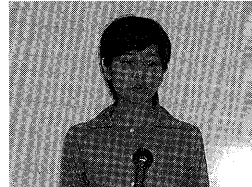
(神戸女学院大学文学部教授：米文化・文学)



松澤員子氏



石川康宏氏



飯田祐子氏



三杉圭子氏

[受講者：49名、平均出席者：34名(第1回受講学生48名は含まない)、修了証交付者：28名]

2006年度後期講演会等のご案内

■学外講演会

会場：宝塚市立男女共同参画センター・エル(宝塚市)

※阪急・JR「宝塚」下車スグ、「ソリオ2」4F

(第1回) 2006年10月7日(土) 14:00~15:30

「異文化コミュニケーションに於ける英語の役割」

講師：松縄 順子氏

(神戸女学院大学文学部教授：通訳)

(第2回) 2006年10月28日(土) 14:00~15:30

「人はなぜ人権を発明したのか……

女性の権利が必要なわけ」

講師：川村 暁雄氏

(神戸女学院大学文学部助教授：国際関係論)

ーディレクター就任(再任)ー

女性学インスティテュート・ディレクターに高橋友子文学部総合文化学学科教授が就任(再任)、任期は2006年4月1日より2008年3月31日までの2年間。

2006年度女性学インスティテュート編集委員

三浦欽也、溝口 薫、高橋友子(委員長)、渡部 充、山本義和(ABC順) 編集事務：溝口芳子

編集・発行：神戸女学院大学女性学インスティテュート

☎662-8505 西宮市岡田山4-1 TEL/FAX:(0798)51-8545

URL <http://www.kobe-c.ac.jp/gender/>